

主 題：キリストの支配にゆだねた歩み②**聖書箇所：コロサイ人への手紙3章16節****テーマ：キリストにすべてをゆだねた歩みとはどのようなものか？**

今朝も皆さんと見ていきたいのは、コロサイ人への手紙3章のみことばです。先々週から私たちは、キリストの支配にゆだねた歩みについて3：15－17を通して学び始めました。その続きを今回も一緒に考えていきたいと思えます。まずはいつものようにみことばをお読みします。きょうは16節を中心に触れていきますが、いま一度15節から読みますので、前回学んだことを思い出ししながら、それぞれ神様のことばに目をとめてみてください。

コロサイ3：15－17

「:15 キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。:16 キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。:17 あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」

さて、キリストによって新しくされた信仰者たちが兄弟姉妹とともに生きていこうとする時、いったい何によって心を支配させ続けるべきなのか、心を留め続けるべき一つの焦点をパウロのことばから考えてきました。そして、その焦点とは、このコロサイの手紙の主題でもありましたけれども、もちろんイエス・キリストでした。特に15－17節で、パウロは三つのことばを用いていました。15節「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい」、16節にも「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ」、そして17節に「すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい」と書いてありました。新しくされた信仰者にとって、どんな時でも、何をするにしてもイエス・キリストこそがすべての中心となるべき十分な存在でした。私たちはいつもキリストに目を向けて、キリストの支配にすべてをゆだねながら、ほかの兄弟姉妹とも一つとなって歩んでいこうとすることが大切でした。もっと言うのであれば、私たちはキリストの平和やキリストのことばによってどんな時も支配されて、イエス・キリストの名によってすべてのことをなしていくことが求められていたのです。

そして、これらのことばを見る時に、私たちは一つの疑問を覚えます。どんな疑問かと言うと、キリストの支配にすべてをゆだねた歩みというのはいったいどのようなものと言うのか、キリストの平和やキリストのことばによって支配される歩みというのはいったいどのような歩みの姿を表すのかというのを、私たちは改めてパウロのことばから学んでいたのです。前は15節から、特にキリストの平和というものに支配されることがどういうことなのかについて考えました。もうここでは詳しくは触れませんが、パウロは15節でキリストがもたらしてくれた神様との平和や神様の平和、それが信仰者それぞれの考えや行動、また兄弟姉妹との関係に至るまですべてのものを支配しているように、制御しているようにと教えていたのです。

○キリストの支配にゆだねた歩み：“キリストのことば”に支配される

でもパウロがここで言っているのは、キリストの平和だけではありませんでした。続けて16節では、私たちがキリストのことばによって支配されることが求められていました。では、このキリストのことばによって支配される歩みというのはいったいどのようなものを表しているのかを一緒に考えてみましょう。キリストのことばに支配されることについて大きく二つ、命令とその影響に分けて順を追

って考えてみたいと思います。果たして自分は今、キリストのことばに支配された歩みをしているのだろうか、ぜひきょうも自分自身のこととして問いかけてみてください。このみことばがひとりひとりにとっての励ましと喜びになることを心から祈っています。

1. 命令：“キリストのことばを住ませる” 16 a 節

では早速、まずは命令そのものから考えてみましょう。16節は「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ」と始まっていました。レジメに記しておきましたけれども、2017年版では、「キリストのことばがあなた方のうちに豊かに住むようにしなさい」と訳されています。よりわかりやすいかもしれません。パウロはここではっきりと命じていました。ここで言われている「キリストのことば」というのは、言いかえればキリストに関する、キリストについてのことばを表しています。イエス・キリストがいったいだれであって、いったい何をなされたのかということを知って教えるそのことば、その教え、その真理のことばです。改めて考えてみてください。私たちは、今何によってキリストのことを知ることができるでしょうか？力にあふれた神様としてのキリストを、へりくだられた人としてのキリストを、罪の赦しをもたらされた救い主としてのキリストを、私たちはいったいどのようにして知ることができるでしょうか。もちろんそれはこの聖書を通して知ることができるのです。私たちは今すでに完成したこの十分なみことばの全体を見る時に、そこに絶え間なくイエス・キリストを目の当たりにします。当然ですけれども、新約聖書を読んでいけば、そこに私たちは地上に来られたイエス・キリストの姿を、またこの方がもたらしてくださった救いのみわざをはっきりと見て取ることができます。

旧約聖書も例外ではありません。旧約を読んでいけば、私たちはそこに救い主が来られるという変わらない約束を見続けるのです。かつてエマオという村に向かうふたりの弟子のもとに現れたイエス様が、彼らにこう教えておられました。ルカ24：27に「それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。」と書いてあります。ですから、最初から最後までイエス・キリストこそがこの本の中心となる存在でした。聖書こそまさにキリストについてのことばでした。そして、パウロはそんなみことばをあなたがたのうちに豊かに住ませなさいと命じていたのです。ここで使われている「住ませ」なさいということばは、文字どおり「家に住む」とか「居住する」という意味があります。また、この動詞には継続を表す現在形が用いられていました。ということは、この住ませなさいというのは、一回きりの話をしているのではないということです。都合のよい時だけ行うものでも、気が向いた時に行うものでもないということです。どんな時でも、私たちのうちにみことばが習慣的に住み続けているようにと求められていたのです。

少し考えてみてください。私たちはみんなそれぞれ家に住んでいると思います。一軒家に住んでいる人もいるでしょうし、アパートやマンションに住んでいる人もいるでしょう。そんな皆さんに、私がもしきょう帰りに、あなたの家について何か教えてくださいと尋ねたら、皆さんは何かしらを教えてくれるはずです。部屋の数やトイレの場所、そういった家の間取りを教えてくれるかもしれませんし、だれがどの部屋を占拠しているということも教えてくれるかもしれません。またある人は、家族に内緒にして隠しているお菓子の場所を教えてくれるかもしれません。内容は何であれ、私は皆さんが教えてくれるまでは何も知りません。でも皆さんはそこに住んでいるので家のことについてだれよりもよくわかっています。長く慣れ親しんだ家であれば、より詳しいことを皆さんは知っているはずです。パウロがここで言わんとしていたことも同じようなことでした。自分の家のことをよく知っているように、私たちはうちに住むキリストのことばを隅々まで深く知ることが求められていたのです。それぞれのうちにいつも神様のことが住み続けるようにし、私たちがそのことばに慣れ親しんでいるということ、深く知っているということが大切でした。

以前、イスラエルの民に対して、申命記6：5－9で「5心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。：6私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。：7

これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。:8 これをしるしとしてあなたの手結びつけ、記章として額の上に置きなさい。:9 これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。」と教えられています。ことばについてどんなことを言われていました？神のことばから離れることがないように、心に刻み込む必要がありました。主の教えを決して忘れてしまうことがないように、どんな時もみことばがそれぞれの生活の中に住んでいること、それぞれの生活のまさに身近なところにあることが欠かせなかったのです。

そして、これは今の私たちにとっても同じです。ただ、これはみことばを知識として知っているという話ではありません。そのことばが絶えず私たちのうちにあり続けることを言うのです。私たちのうちにみことばを住ませ、みことばに慣れ親しみ、そのすばらしさを味わって、私たちのうちでみことばが生きて働くものでなくてはならないのです。間違いなく言えるのは、もし私たちが聖書と時間を取っていないのであれば、このようなみことばに親しむ者には到底なれないということです。ましてやパウロは16節で、単に「キリストのことばをあなたがたのうちに住ませなさい」ではなく、「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ」と言っていました。この「豊かに」ということばは、「こぼれそうな」とか「あふれんばかりの」といった意味が含まれています。みことばが私たちのうちにただあるだけではなくて、もうそこにはとどまっていられないくらいあふれているのです。まるで流れ出していきそうな様子が描かれているのです。そしてもっと言うのであれば、そうやって流れ出しそうになっているみことばの真理がその人の考えやことばや行いといったすべての部分に浸透して、その人を支配するようになっていくということです。キリストのことばを私たちのうちに豊かに住ませるとするのは、私たちがただ単に知識として知っているということではなくて、私たちのうちにいつもみことばがあって、私たちがそのみことばのすばらしさをいつも知っていて、そのみことばにいつも親しんでいて、そのみことばがあふれんばかりに私たちのうちにあふれているからこそ、私たちが何かを考える時いつもそこにみことばがあり、私たちが何かを思う時そこにいつもみことばがあり、私たちが何かを行動しようとする時いつもそこにみことばがあり、私たちが何かを決定するその意思においても、そこにいつもみことばがあるということです。私たちのうちにみことばが豊かにあふれんばかりになっているからこそ、すべての部分においてそれが浸透していくのです。

かつてスポルジョンはこんなことばを残していました。「親愛なる友よ。あらゆる形でキリストのことばに満ち溢れるようにしなさい。御言葉はまず（よく聞いてください）自分の内になければ、外に出てくることはありません。」と。まさにそのとおりだと思いませんか？確実に言えるのは、もし私たちが神様のことばを知らないのだとすれば、私たちから出てくることばも、私たちから出てくる態度も、みことばにのっとったものではないのです。もし私たちが聖書を読んだり、学んだり、それに思いをめぐらせることがないのであれば、そんな私たちからいったい何が出てくることを期待します？私たちの考えや思いというものが、どんなものを現すことを私たちは期待します？私たちの態度やふるまいが何を示すことを期待します？今私たちはコロサイ3章から、キリストによって新しくされた者が新しくされた生き方をしていくことを見ています。互いに愛し合うことや互いに赦し合うことも見てきました。ますますキリストに似た者へと変えられていくことを願って、私たちは歩んでいこうとするのです。でも、もし私たちが、キリストがどのように歩まれたのかを知らなければ、キリストがキリストのように考えて、キリストのように話して、キリストのようにふるまう者として成長していくことは果たしてできるのでしょうか？知らなければできないわけがありません。だからこそ私たちにとって、みことばと個人的な時間を取ることは絶対に欠かせないです。果たして私たちは日々の生活の中において、どれほど聖書を自分自身のうちに熱心に住ませようとしているのでしょうか？このようなことを考えていると、みことばとどれほど時間を取ろうとしていますかと質問されることがあります。そう聞かれたら、多くの人が「私はまだ

まだ全然足りていません、成長しなければいけません」と正直に口にしましょう。それは私も同じです。

でも同時に、次の質問をよく考えてください。「足りていない」と言うのであれば、果たして自分自身の優先順位において、みことばとの時間をどこに位置づけているでしょう。足りないのはわかりました。私たちは、聖書の必要性を自分のこととして本当に信じているのでしょうか？みことばははっきりと言っていました。例えばⅠペテロ2：2に「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」とあります。私たちの霊的成長のために、みことばの乳が必要なのだと、神様のことばは明白に述べていました。赤ちゃんが母親の乳を慕い求めるように、それが自分にとっての最優先事項であるように、果たして私たちは、みことばの乳を慕い求めることを最優先されるべきものとして考えているのでしょうか？自分にとってなくてはならないものであると、本当に信じているのでしょうか？また別の箇所でもはっきりと言われていました。私たちもよく知ってる箇所の一つですけれども、Ⅱテモテ3：16－17に「16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」と書いてありました。神様のことばが明白に述べているように、私たちは教えや戒め、矯正や義の訓練のために、みことばが自分にとって有益なものであると信じているのでしょうか？「聖書はすべて、神の靈感によるもので」と書いていました。私たちがみことばを見る時に、自分たちで勝手にこの部分は自分には必要ない、この部分は自分にとって大切だと取捨選択をしていないでしょうか？自分にとって神のことばのすべてが「良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるため」に必要なのだと信じているのでしょうか？

そして、もし私たちが、その質問に対して「はい」と言うのであれば、では果たして私たちのうちに今神様のことばは豊かに住んでいるのでしょうか？よく考えてみてください。私たちの日々の歩みに必要なすべての知恵は、私たちに必要な力や助けは、この本からやって来ます。私たちは、模範である愛するイエス・キリストの残されたことばやふるまい、何よりもイエス・キリストが成し遂げられた救いのみわざを聖書の中にいつも見て取ることができます。みことばは変わらない神様のすばらしい約束やご計画、その希望というものを私たちに教え続けてくれます。それだけではなく、神様に喜ばれる者として、神様に喜ばれる夫婦のあり方を教えてくれたり、神様の喜ばれる子育てのあり方もはっきりと教えてくれます。みことばは教会での働きについても、兄弟姉妹との生き方についても、また悪にあふれたこの世にあって、私たちがあかしを立てていくために必要となる神の武器さえも与えてくれるのです。もちろん何もなかったとしても、いろいろな難しさを私たちは経験します。でも、もしそんなすべてにおいて十分なみことばを自分のうちに豊かに蓄えようともせず、その教えにみずから耳を傾けようともせず、たとえ時間を取ったとしても、余りの時間で少しだけみことばに触れて、毎日を過ごし続けているのであれば、その歩みが問題を抱えたとしても、ある意味当然と言えるでしょう。だからこそ神様が与えてくださったこのすばらしいみことばを、私たちはいつも追い求めることが必要になるのです。私たちに必要なのを与えてくれるこのみことばを、私たちがいつも読んで、それを学んで、難しいところがあってもそこに格闘し、理解して、神様、あなたのことをますます知ることができるよう助けてくださいと、助けを祈り求めながら、みことばの真理を思いめぐらせながら歩んでいこうとするのです。そうやってキリストのことばをうちに宿すことによって、キリストの考えや基準が自分自身の考えや基準となっていくように、キリストのことばを豊かに住まわせて、それによってすべてを支配させ続けて歩んでいこうとするのです。キリストのことばを私たちのうちに豊かに住まわせなさいと、それが私たちに教えられていたことでした。

2. 影響：“キリストのことば”がもたらす三つの実16b－d節

私たちがそうやってみことばに喜びを見出して、私たちのうちにみことばを住ませ続けていくのであれば、その結果としてある影響が現れるようになると、パウロは続けて教えてくれています。キリストのことばというものがその人のうちであふれそうになっているのであれば、その歩みにはある三つの実というものが現れるようになるというのです。では、いったいどのような実なのか、16節に戻ってよく見てください。

a) 互いに教え合うこと 16 b 節

続きに「……あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え」と書いてありました。まず一つ目にキリストのことばがもたらす実は、互いに教え合うことでした。キリストのことばをあふれんばかり自分のうちに蓄えている者というのは、その教えや真理を自分自身のうちにだけとどめておこうとするのではなく、ほかの人にも喜んで伝えようとしています。ここで用いられていた「教え」ということばは、以前見たコロサイ 1 : 28 で同じものを使っていました。そこには「私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」と続いています。パウロはまさにあらゆる人を教えていました。この教えるということばには、文字どおり「人に何かをするように教える」とか「指導する」、また「訓練する」といった意味が含まれていました。要するに、私たちがみことばからキリストに関する知識や真理を知ったのであれば、それを自分のものとするだけでなく、人に教えてあげようとするのです。そしてただ教えてあげようとするだけでなく、その人がその真理に基づいて歩いていくことができるようにと訓練してあげるのです。

そして、このことばを記したパウロこそ、まさにそのような生き方をしていました。かつてキリストを熱心に迫害する者として生きていた彼の人生は、キリストを知った時、すべてが変わったのです。パウロは自分自身の救いのあかしをはっきりと口にしていました。ピリピ 3 : 7-8 に「:7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくと考えています。」と書いていました。確かに人の目から見れば、パウロは誇りや宝とすることのできるようなものをかつてたくさん持っていました。でもたとえどんなものであったとしても、彼にとってキリストを知っているということに比べることができるものは何一つとしてなかったのです。キリストを知っていることのすばらしさが彼のうちにあり続けました。だからこそ彼は自分自身がそんなキリストをますます知っていくことを望んでいただけでなく、自分が知ったキリストのすばらしさをほかの人々にも宣べ伝えることにおいて忠実であろうとしていました。

別の箇所では彼もこうも述べています。I コリント 1 : 18、23-24 に、「:18 十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。……:23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、:24 しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。」と書いています。こうしてパウロは、いつも自分の知恵や考えではなくて、神の力であり、その知恵であるキリストを人々の間で教え続けていました。救いを必要とする者には十字架のことばを宣べ伝え、救われた者に対してはキリストにある成人として立たせるために、彼らの目をいつもキリストに向けさせ続けていました。ただみことばの真理を通して、知恵を尽くし、人々を指導し続けていたのです。そして、これは今の私たちにも同じように求められていた応答だということなのです。

コロサイ 3 : 16 には「知恵を尽くして牧師は教え」とは書いてありませんでした。もちろん私自身も、長老たちも教えるという責任を負っています。でもここでは「互いに教え」と書いていました。自分たちがみことばを読んで、それをうちに豊かに住ませることに熱心であるだけではありません。そのみこ

とばの真理を互いに教え合うことが求められていました。私たちは聖書からキリストの偉大な姿やその模範、そのすばらしさを知って、それをほかの兄弟姉妹にも喜んで伝え、互いにますますキリストに似た者となっていこうと、励まし合いながら歩いていこうとするのです。互いに教え合うということ、それが必要なことでした。

b) 互いに戒め合うこと 16 c 節

これに加えて、二つ目の実が16節に「知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め」と続けて記されています。キリストのことばがもたらす二つ目の実は、互いに戒め合うことでした。みことばをあふれんばかり自分のうちに蓄える者は、その教えや真理が自分自身のうちから流れ出し、そしてそれらを用いてお互いの間で戒めることも実践しようとするのです。この「戒め」ということばも、先ほど触れたコロサイ1:28に「あらゆる人を戒め」と、同じことばが使われていました。このことばは、「心」を表す“ノウス”と「(何かを)置く」を表す“ティテーミ”の二つがくっついて成り立つ“ノウセテオ”というギリシャ語が用いられていました。もともとこのことばには、「人の心に何かを置いて思い出させる」といった意味がありました。そして、ここから間違っただるまいや考えをやめるように警告するとか、諭すこと、過ちを叱責することといった意味で聖書の中で用いられています。間違っている人がいるのであれば、その人の心に置いてあげるのです。諭してあげるのです。叱責してあげるのです。要するに戒めるといのは、正しい道から外れてしまった者に警告を与えて、何が正しいのかを思い出させてあげて、正しい道へと引き戻してあげることでした。もちろんこれは、その内容が時に相手にとって厳しいものであったとしてもです。キリストから離れて、間違っただを進んでいる者がいるのだとすれば、その人を愛するがゆえに、その人の罪や過ちを諭してあげようとするのです。

こうして聞いてきて、互いに教え合うことも、互いに戒め合うことも、私たちのうちにみことばがなかったら、そんなことはできません。知恵をもって教えてあげようとする時に、私たちのうちに知恵であるみことばがなかったら教えることはできません。私たちのうちにみことばが住み続けているのであれば、私たちはそのみことばをもって互いに教え、戒め合おうとするのです。確かに、互いに戒めると聞くと、特に私たちはこのことばに難しさやためらいを覚えてしまいます。だれかの罪を指摘する、それによって関係が壊れてしまうことを恐れてしまうこともあります。言えるのは、もし私たちが何よりも自分のことを愛して、だれかとの争いに巻き込まれないことを一番に考えて行動し続けていくのであれば、だれも兄弟姉妹に対して罪や真実を語ろうとはしないでしょ。自分自身のことだけを考えるのであれば、そんなことはしないのです。それは、彼らの罪と向き合えば、自分自身も彼らの痛みや悲しみと向き合わなくてはならないようになります。だから私たちのよくしてしまう応答は、見たくないものにふたをすることです。見たくないものから離れていくことです。でもみことばはそれを決してよしとはしていませんでした。むしろ兄弟姉妹がみことばにいつも立って、互いに間違いや罪に気づかせ合うことが必要なのだと、パウロは何度も教えていたのです。

ローマ15:14に「私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。」と書いています。またガラテヤ6:1には「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。」とありました。忘れてはいけません、罪は私たちを盲目にし、だまそうとします。まるでキリスト以外のところに喜びや満足があるかのように嘘をつき、誤った道へと進ませようとするのです。私たちはひとりだと絶え間ない罪の誘惑、罪との戦いによって心が惑わされ、目を留めているべき真理を忘れてしまうことがあります。大きな危険がそこにはいつも存在しているのです。だからこそ私たちが間違っただを行っているのであれば、違うよと引き戻してくれる愛と忍耐と寛容を持って正してくれる兄弟姉妹の助けが私たちひとりひとりにとって、なくてはならないものでした。

私たちにはお互いが必要だということです。たったひとりの信仰生活を送っていくのではありません。もちろんそれぞれがみことばを学んで、真理をうちに住まわせて、あわれみ深い神様の助けを祈り求めながら歩いていくことはできます。でも私たちを恵みによって救い出してくださった神様は、恵みによってほかの兄弟姉妹を与えてくれました。同じように主を愛し、キリストに似た者へと変わっていきたいとする神の家族を、教会を、私たちの歩みのうちに与えてくださったのです。だからこそそんな者たちと一緒にあって、日々キリストのことばを教え合って、戒め合いながら歩いていこうとすることです。もちろん互いの間で罪を指摘することに難しさやためらいを覚えることもあるでしょう。さまざまな犠牲を払うことになるかもしれません。しかし、たとえそうであったとしても、愛する者たちが罪から離れてキリストのすばらしさをますます知る者として成長していくことを願うからこそ、自分がキリストに似た者になっていきたいと願うのを、人に対しても思うからこそ、私たちは互いに真理を語り合いながら歩いていこうとすることです。キリストのことばを私たちのうちにあふれさせるのであれば、私たちのうちに豊かに住まわせるのであれば、キリストのすばらしさや福音のすばらしさ、キリストにある赦しや約束や希望を知り続けていくことによって、それが自分のうちではとどまらず、ほかの人にもそれを教え、それを戒めようとしながら歩いていくのです。それこそキリストのことばを豊かに住まわせる者にとってのふさわしい応答でした。それが自然に出てくる応答でした。そしてそれが私たちにとえられた責任でもあったのです。

c) 感謝にあふれてともに賛美をささげること 16 d 節

そして最後に、キリストのことばがもたらす実が16節の終わりに「詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい」と書かれています。三つ目の実とは、感謝にあふれてともに賛美をささげることでした。パウロは、キリストのことばが私たちの心で豊かに流れ出すのであれば、お互いの間において、みことばの会話がなされるだけではなくて、みことばの賛美というものが生まれると言うのです。キリストのことばに支配される者のうちには、神様への感謝と喜びの歌があふれるようになると言います。でも、まさにそのとおりです。私もそんな経験をしたことがあります。みことばを通して、聖書を通して、私たちがキリストとそのみわざを知れば知るほど、この方が成し遂げてくださったことの測り知ることのできない犠牲と愛を覚える時、そこに大きな驚きが私たちのうちに増し加わっていくのです。聖書を通して、聖なる神様が罪深い私たちのためにいかに深いあわれみを示してくださったのかを知れば知るほど、神様への感謝や賞賛が私たちのうちに満ちあふれるようになっていくのです。私たちが神様を知れば知るほど、自分たちがどのような存在なのかを知れば知るほど、神様、感謝します、こんな愚かな私に値しない恵みを、愛を示してくださったことは、言い尽くすことのできない喜びです。私たちはそれをこのみことばを通して知るのです。こうしてみことばの真理は、ただ知識や情報を蓄えさせるのではなくて、神様への心からの賛美をその人のうちに生み出すようになります。私たちがみことばを知れば知るほど、私たちのうちには感謝が必ず出てきます。私たちはキリストのことばを豊かに私たちのうちに今住まわせているのでしょうか？神様に対する感謝が増し加わっているのでしょうか？

また特にパウロは、16節で「詩と賛美と霊の歌とにより」と、三つのことばを使っていました。これら三つのことばの違いに関しては、聖書学者の中でもずっと議論されていて、はっきりとした違いはまだ明白になっていません。でも少なくとも言えるのは、この一番最初の「詩」というのは、旧約聖書の中に出てくる詩篇のことであると考えられています。150篇からなる詩篇は、当時から神様に対する賛美として、神殿などの礼拝において用いられていました。人々は詩篇を賛美していたのです。

次に出てきていた「賛美」というのは、キリストについての歌、新約聖書の中にも登場しているような初代教会の時から教会で賛美されていたもののことを指していると考えられています。多くの学者は、以前見たコロサイ1：15－20のところが初代教会で歌われていた最も古い賛美の一つではないかと考えています。人々はこのみことばを賛美したのです。一度学びましたけれども、15節から「:15 御子

は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。：16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も權威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。：17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。：18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。：19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、：20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」と書いていました。皆さんがタイトルをつけるとしたら、「御子」とつけるかもしれません。彼らは御子を、イエス・キリストを賛美していたのです。イエス・キリストがいったいだれなのか、この方がいったい何をなされたのかという真理を覚えて、そのことを感謝し、ともに集まり、賛美をささげていたのです。

そして最後に、「**霊の歌**」というのは、今見てきた詩篇やキリストについての歌以外の歌のことです。内住する聖霊なる神様によって、人のうちに生み出される神様のみわざをたたえる賛美のことであると考えられています。簡潔に言えば、詩篇やキリストについての歌以外のいろいろな曲、神様のみわざをたたえる曲のことを指しているのではないかと考えられています。さっきも言いましたけれども、詳しい違いはわかりません。でも、ポイントは、パウロはこうしてさまざまな歌でもって信仰者が神様に向かって心からの賛美をささげることを求めていたということです。キリストのことばを通して、キリストの偉大さに、そのすばらしさに心を奪われた者たちがほかのものに気を留めることなく、ただ感謝にあふれて、感謝を表す、そのことだけにとらわれていたということです。

ここで覚えていてほしいことがあります。それは、神様は単に唇だけを動かさず賛美を求めていないということです。私たちの心はみことばによって、真理によって動かされて、神様のすばらしさを覚えて、心の底からささげる礼拝者を、賛美者を求めておられるということです。かつてイエス様もこのように言われていました。ヨハネ4：24に「**神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。**」と。少し考えてみてください。果たして私たちは、キリストのことばがいつもうちにあって、その余りのすばらしさのゆえに賛美があふれ出しているのでしょうか？喜びや感謝の心から自然に主を歌でもってたたえよう、そのように歩んでいるのでしょうか？それともただ空しく唇を動かしているだけでしょうか？

教会というのは、非常にユニークなところです。なぜかという、キリストのすばらしさを知っている教会というのは、いろいろな賛美をもって、いろいろな歌でもって、神様をほめたたえようとするのです。私たちがPTAの集まりなど、いろいろな会合に行った時に、さあ歌をもって始めましょうなどというところがあります？でも私たちが教会に来れば、いつも賛美をもって神様をほめたたえようとするのです。いろいろな歌をもって、私たちは神様に喜びを表わそうとするのです。私たちがキリストの、またそのみわざの偉大さを知って、その真理に心がいっぱいになっていけば、何を置いても主に感謝したいと心が動かされて、私たちはともに集まり、神様に賛美をささげようとするのです。こうして私たちが集まって来て、賛美をささげているのはそのためです。私たちが集まってきているのは、私たちの主がいかにすばらしいお方なのかを覚えた時に、私たちの心が感謝せずには、喜びを賛美として表さずにはいられないからです。キリストのことばをうちに蓄える者は、豊かに住まわせる者にとっては、そのすばらしさを知っている者にとっては、それが最も自然な応答でした。

さて、今朝、私たちはキリストのことばに支配されることについて考えてきました。改めて自分自身に問いかけてみてください。果たしてキリストのことばを今自分は自分のうちに豊かに住まわせているのでしょうか？みことばといつも時間をともに過ごして、キリストとその真理のすばらしさが、うちであふれんばかりになっているのでしょうか？あふれんばかりになっているからこそだれかに伝えたいと、互い

に教え合い、戒め合うことに喜びを見出しているのでしょうか？みことばのすばらしさを、神様の偉大さを見るからこそ、私たちは何より神様への感謝にあふれて、心から神様に向かって賛美をささげようとしているのでしょうか？もちろんみことばにより親しんでいく上で、さまざまな困難を覚えることはあります。理解をするのに難しさを覚える箇所もちろんありますし、また自分自身が神様から与えられているいろいろな責任の中で、どれだけみことばに向き合うのかということには、知恵や犠牲というものをよく考えないといけません。でもたとえ何があったとしても、この聖書を通して、世界を造られ、私たちを創造された神様を知ることができます。私たちが罪から救い出してくださったキリストと福音のすばらしさを、私たちはこの聖書から知ることができます。そしてこの神様にある揺らぐことのない約束を、希望を、ご計画を、いつもここに見出し続けることができるのです。だとすると、そんなみことばを熱心に求めて、自分のうちにますます住まわせる者として成長していきたいと思いませんか？自分自身がみことばを蓄えるだけではなくて、私たちが知った神様のすばらしさを少しでもほかの兄弟姉妹にも伝えたいと思いませんか？そしてキリストの偉大さを知れば知るほど、同じキリストを愛する者たちとともに、その喜びというもの、感謝というもの、賛美というものを神様に向かって心から歌いたいと思いませんか？ぜひそのような者として、ますます一緒に成長していきましょう。キリストのことばにすべてをゆだねて、どんな時も主の栄光を現す者として、今週も主の助けを祈り求めながら歩いていきましょう。